

景観フォーラム

日本景観フォーラム会報

創刊号(2011年4月1日)

〈巻頭言〉

会報の創刊に寄せて

理事長 齊藤全彦

2009年6月に日本景観フォーラムを立ち上げ、早や3年目が来ようとしております。初年度は、関東近郊の景観行政団体を訪問し、行政が表明している景観計画と実際に行われている景観行政とを比較検討いたしました。現実のところ、ほとんどの自治体は景観計画だけを表明するだけで、景観行政は実践していないという事が理解できました。全国の景観行政団体を限なく廻って結論を出すべきかもしれませんが、大体のサンプルから、殆どの景観に関する行政行為は「絵に描いた餅」であることが推察できました。おそらく、環境問題が人的被害を生じさせるなどの深刻かつ緊急な事件として社会問題になるのと異なり、景観問題は早急な社会問題として取り上げられないという特質があるからでしょう。有害物質とか二酸化炭素などは科学的手段によって明らかに議論の対象となりますが、景観における高さ問題とかは見ればすぐ理解できるにしても、社会の悪しき「常識」と言うバリエーションによって、市民の「良識」まで届かなくさせております。

当フォーラムでは3年目に突入するにあたって、会員の皆様とご一緒に会報という手段によって、もう一度この「良識」というものに磨きをかけたいと考えます。現代の景観問題を考えるに際し、様々な多くの生産的意見の中から「常識」を疑い「良識」を創造するという事が、今こそ求められているのではないのでしょうか。

会員の皆様のご積極的ご参加をお願い申し上げます。



お知らせ

今回のような「会報」を年4回(季刊)で発行します。そこで、会員の皆様には原稿をご依頼することがありますので、その際にはよろしくお願ひします。

●今後の日程

◇エリアスケイプ・マネジメント勉強会

日時：4月13日(水) 東京・四谷

◇定例研究会 日時：5月第2水曜日または第3水曜日

場所：未定(目黒区または新宿区)

研究会報告 (2011年1月20日)

景観とまちづくり～

景観は“市民の質”の反映である

講師 野口 和雄 <都市プランナー>

1月20日の研究会では、都市プランナーの野口和雄さんが「景観とまちづくり～景観は“市民の質”の反映である」と題してご講演し、全員で熟議しました。野口さんは、なぜ日本の都市の景観は醜いのかという問題提起の後に、景観法や景観条例に言及しながら、美しい都市をつくるための二つの方法論を提示してくれました。

一つ目は、英国のチャールズ王子が出版した『英国の未来像の中で提起した美しい景観になるための10の原則。そのキーワードは① 場所② 建築の格付け③ 尺度④ 調和⑤ 塀⑥ 素材⑦ 装飾⑧ 芸術⑨ 看板と照明⑩ コミュニティーです。

二つ目は、ウィーン出身の都市計画家で建築家のクリストファー・アレグザンダーが提唱した建築・都市計画の理論「パタン・ランゲージ」です。景観の構造・要素を言葉で表したのですが、人々が「心地よい」と感じる253のパターンを組み合わせて、文脈をもった景観づくりを展開していきましょうというもの。言わば言葉で組み立てる建設手法といってよいでしょう。

■美しい景観

「見苦しい景観」になってしまうというのは、「まちづくり」(建設から維持管理、環境改善まで)の段階で、景観に関する議論が十分に行われてこなかったという結果に他なりません。また、そのような場所は街のストーリー、あるいは「文脈」といったものがほとんど形成されていません。行政などが作成する計画書などでは決まって「賑わい」だとか、「安全安心」などの常套句が羅列されていますが、ただの言葉で中身のない場合がほとんどです。

「美しい景観」を素直な気持ちで捉えるならば、「ここにいるとなぜか落ち着く」「昭和の時代に戻ったような懐かしさ」「ここにいるだけで健康になりそう」「外国にいるみたい」など言葉がつい出てしまうような景観です。美しさにはよいイメージが伴いますが、逆にイメージが湧かない空虚な空間は、「見苦しい景観」になります。ですから計画書もそのような中身の伴った言葉で表現されるべきです。

建築という仕事によって「美しい景観」を創り出すのは、単語が意味を持って組み合わせられて文章になり、詩になったりするように、パターンが集まって言語になり、その言語から美しい景観や地域コミュニティを形成

するのが、「パタン・ランゲージ」です。それを活用して、まちづくりをしているのが、神奈川県真鶴町です。この手法は、埼玉県川越市で蔵のある商店が立ち並ぶ一番町でも取り入れられています。

真鶴町ではこれを自治体として実践するために、「美の条例」というものを設けました。条例があれば、地権者やディベロッパー側が金儲け本位で、周囲にそぐわない色や形状の建物を建てたり、地域紛争の元になる建設計画は進められなくなります。結果的に真鶴町は良好な景観が維持されています。

■議論でギャップを埋める

まちづくりは、そのまちな関わるあらゆる職業、階層、分野の人たちが直接間接に関わる活動です。しかも異なる

利害、異なった思想、考えが常にぶつかり合う場でもあります。きれいな事言っても仕方ありません。主張すべきことはしっかり主張して、認めるところは認める、そのようなフェアな議論が行われな限り、異質なものの同士のギャップは埋まらないでしょう。そこで使われるのは、言葉であり、人を動かすのは、感動や共鳴、同情、希望です。それらが現れるまでトコトン話し合う。歴史や文化の情報も注入され、共通認識が生まれる。無縁が有縁になり、街のストーリーが生まれる。そこで初めて、まちが動き出す。歴史を守った町や地域はほとんどそうしてきました。

ところが、多くはそのような議論が事前には行われません。「一部も全体」という考えがほとんどないからです。地権者は法律の範囲なら地域住民がどんなに被害を被ろうと自分の土地に好きな建物をつくれます。それを国や都道府県は制度的に認めています。ですから、景観は美しくならないばかりか、場合によっては地域紛争も起こります。コミュニティも崩壊します。美しい景観とは「主観」ではないかといわれます。しかし、話し合っていくことによって「主観」が「客観」に近づくわけで、それを可能にするのが、まちづくりのためのフォーラム(シンポジウムやワークショップ、まちあるき、作品発表会などのコミュニケーション活動)です。そうしたコミュニケーションを円滑にするための共通言語ということで「パタン・ランゲージ」は大変参考になると思います。(文責・豊村泰彦)

●パタン・ランゲージ—環境設計の手引「クリストファー・アレグザンダー(著)、平田 翰那(翻訳) 鹿島出版会



企業訪問(経過報告)

日本景観フォーラムの活動で、企業は重要な一翼を担っております。景観を良くするには企業活動は欠かせないものであるはずで、フォーラムでは企業の積極的な参加を呼び掛けています。

今回は昨年10月から初めて企業訪問を実施し、小田急電鉄、東急電鉄、日本IBM、日本電気、東武鉄道、JR東日本、東京ガス、JT B、帝人、豊田通商、三菱地所、大成建設、ポーラ等を訪問いたしました。具体的なコラボレーションはまだ始まってはいませんが、大成建設、JT Bなどからは再度の訪問要請があり、何らかの展開が期待できそうです。会員の皆さまの中で、企業訪問に参加されたい方は是非申し出てください。

事務局より

ケイカン・ドット・コラム

第1回 法律がないと景観はよくなる？

前々回の研究会で徐々に「景観法」が話題に上った。これまで毎月の研究会で、景観についていろいろ議論してきたのに、景観法があまりテーマに取り上げられなかったのは、景観は、法律の一つや二つで変わるほど単純なものではないと考えているからである。しかしながら、景観法に基づいて、条令ができ、景観行政団体が誕生し、景観計画ができてくると、景観は役所の仕事であると錯覚してしまう人も多いのではないかと危惧している。というのは、日本人は議論（ディスカッション）や交渉（ネゴシエーション）よりも制度や法律（レギュレーション）あるいは慣習（トラディション）に馴染む性向があるからである。

景観法は全国を一律の基準で景観の誘導を図ることは意図していないが、それぞれの自治体が条例と景観計画を策定して、公共事業や私的な建設計画をコントロールできるようにした法律ということができる。ではどこが基準を作るかとなると、やはり国がまず一定の枠を決め、都道府県や市町村が条例という形で基準をつくる。その基準に基づいて、市民レベルでまちづくりが行われるならば、景観という「国家財産」について上から下までの管理体制が築かれることになる。「すべての道は天に通ず」で下の物は順番に一段上にお伺いを立てるわけだが、これでは他の法律と何ら変わらない。もちろんまだ景観条例や景観計画を設けている自治体のほうが少ないので景観法による「縦割り構造」が完成しているわけではない。

ここでちょっと疑問に思うのは、地域の人が代々守ってきた景観をどうして国、都道府県の法律（条例）事項にしてしまったかということである。「景観法」はほんとうに景観をよくするための法律なのだろうか。今までは建築基準法や都市計画法のように法律は景観を壊す人（事業者）のためにあった。だから景観法だけが例外だと単純に信じるわけにはいかないのだ。やはり法律や条令だけに頼るのはかなり危険である。やはり市民自らが法律以外、例えば「道徳」「礼儀」「作法」のレベルでも景観を守るよう心掛けるべきだろう。

大多数の人が景観を美しい都市景観を守ることが国民の義務という考えになれば、それだけでも街は美しくなる方向で向かうのではないか。もし、「不文律」を破れば、世間様が許しておかない。無法者は、村八分（仲間はずれ）になったり、トマトを投げつけられたり、恥ずかしくて外を歩けなくなったりするからだ。そういった掟やきまりが生きている社会のほうが景観は守られるような気がする。（Y.T）



景観を考える本

英国の未来像 チャールズ皇太子著

東京書籍 1991年刊



1988年英国のチャールズ皇太子はBBCテレビで“Vision of Britain: A Personal View of Architecture”（英国の未来像：建築に関する個人的見解）という連続講演を行った。事例を多く用いたこの放送の反響は大きく、1万通余りの皇太子へのラブコールと、当然業界等の喧々諤々の議論がなされたという。この書はそれをもとに、翌年に同名の書籍として刊行されたものである。確かに、皇太子の見解は保守的である。だが、人々が日常生活の場で“本来の豊かな生活をおくるとは何か“を考えると、皇太子の見解に反論することができないのである。「最も発達した技術社会に暮らせるとしても、同時にわれわれが魂を失い文化的生活をおくる権利を剥奪されるだけだとしたら、その技術社会の目的とは何なのだろう。」と述べているように、彼の視点は単なる建築という枠を超えて現代文明批判へと達しているのである。彼こそは、地球環境問題を早くから住環境をもとにした景観問題として捉えていたのである。

次期王位に就く人間ともあろうものが、何と一般市民の視線で考えられていることであろうか。しかし、逆に伝統文化の継承を体現しなければならぬ皇族の者であればこそ、このような発言が意味を持つのかもしれない。セント・ポール大聖堂は今もしっかりと自己を表現しており、その邪魔をしてはいけぬ。（斉藤）

投稿欄

まずはあの「日本橋」をどうにかすることから始めよう

お江戸文化の発信拠点である日本橋の上には、現在高速道路が通り、周りには高層ビルが建ち並ぶなど、景観的に極めて劣悪な状態になっております。また、先頃早大の尾島俊雄名誉教授が周辺地域のヒートアイランド効果の研究をしたところ、首都高層を地中化すれば気温が最大で2度、体感温度では5度下がるというニュースが新聞に出ていたので、環境的にも相当悪い状況なのでしょう。もっとも悪いことは研究しなくても一目見れば誰でも分かることなのですが、それがなかなか改善できないというところに日本社会の弱さを感じます。日本橋ルネサンス委員会というのがあって、今後の100年をかけて日本橋地域の活性化しましょうと研究しているのですが、早い話、地上の高速道路を撤廃すれば終わる話です。5～6年程度で造ったものが壊すのに100年もかかるはずがないのです。韓国ではほぼ同様の条件下にある清溪川（チョングジョン）を修復したのですからできないはずがありません。それを「地中化するのは大変だから」で「数千億円という巨費がかかるから」などと言って、マイナス要因を見つけて行動を起こさないのは、本気で景観や環境をよくしていこうという人が中核にいないからだと思います。日本では目先の経済の活性化で歴史も文化もいとも簡単に破壊してきたのに、高層道路だけは壊すことができないのでしょうか。政策が誤りだと分かっても軌道修正する力がないのでしょうか。そこに日本の政治・経済体制の大きな弱点があり、今後日本が間違った道に迷い込む危うさを秘めているように思うのです。（Y・T）



エリアスケイプ・マネジメント勉強会

現在の日本の都市開発の多くが不動産屋的発想で進められ、建物を造って、販売して、儲けて終わり、ということですまされてきましたので、その結果、鳥かごのようなビルが商業区域、住宅区域問わず占有し、景観を破壊し、コミュニティの芽も育たないような空間を拡大していきました。それに一石を投じるような新しい都市計画の手法として、ここ数年、エリアマネジメントが中心市街地活性化などで取り上げられるようになりました。フォーラムでは、エリアマネジメントと景観形成を合体させた手法（エリアスケイプ・マネジメント）を新たに開発しようとする有志による勉強会を4月からスタートさせます。

第1回目は4月13日（水）場所は東京・四谷で開催する予定です。メールでもご案内しますので、よろしくお願ひします。（事務局より）

ふおーらむひろば

<Review of Book Review>

良き景観とはどのようなもののでしょうか。都市景観にせよ自然景観にせよ、出会った景観が豊かな気持ちにさせてくれるというものが、“良き景観”というものではないのでしょうか。では、その豊かな気持ちというものは、人によりその状況により、色々な様相を呈します。しかし、その豊かな気持ちという経験はすべての人が理解しております。そういう意味で、良き景観を追求することは景観工学だけでもないし、建築・土木・造園学だけでもないし、また文化地理学の分野だけでもない実に学際的な分野をその特徴とするものでしょう。

今までのこの分野において景観を論じてきたもので欠けていたところは、景観に関しての人々の気持ちの動きというものを忘れていたことです。それは単に科学工学的な人の感覚分析だけでなく、人々の心の在り方こそ大事なポイントであるということでしょう。そういう意味でこの“良き景観”を追求するというにはそこに住み景観を作り上げているコミュニティーを理解し、良き社会とは何かというところまで考えていかなければならないでしょう。

この「ブックレビュー」というコーナーは以上のような観点から、多様な書籍をご紹介します。良き景観とは良きコミュニティに支えられており、ひいては良き社会を創り上げる原点であるという信念です。どうぞ皆様もそのような気持ちでブックハンティングに行かれたらいかがでしょうか。（M・S）

特定非営利活動法人 日本景観フォーラム
〒152-0011
東京都目黒区原町2-8-14パレ洗足301
TEL 03-6802-7331
FAX 03-3793-9192
E-mail info@keikan-forum.com
ホームページ: <http://keikan-forum.com/>